

2020年度

2月1日 午後

特待入試

国 語

(50分)

注 意

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は□一から□三まで、16ページにわたって印刷してあります。
- 3 解答の下書きが必要なときは、この問題用紙の余白を利用しなさい。
- 4 解答用紙には、受験番号と氏名を書きなさい。
- 5 解答はすべて解答用紙に書き、解答用紙を提出しなさい。
- 6 句読点、記号は字数に数えなさい。
- 7 本文中には、問題作成のために省略や表現を変えたところがあります。

かえつ有明中学校

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「身体を中心に人間をとらえよう」。^{*}メルロ＝ポンティはそのように^A提唱しました。

自分のこの身体でもって、この世界に住んでいるのだから、世界はこう見えて、こう感じられるのではないか。この身体で世界に接しているから、いろいろなことを考え感じて、自分が形成されているのではないか。メルロ＝ポンティはこのようなことを主張します。「^①私たちは、身体として世界に住みこんでいる」というのは、実感しやすい考え方です。

たとえば、仮にノミが人間並みの頭脳を持っているとすると、ノミの身体を通した価値観や世界観をその「ノミ」は持つように思います。頭脳が人間と同じだからといって、人間と同じような考え方や感じ方はしないでしょう。

あるいは、たとえば目はないけれど、鼻は犬並みに利^きき、脳は人間と同等で、人間に似た姿をしている動物（人間？）はどうでしょうか。人間は視覚に頼^{たよ}ることの多い動物ですが、こうなると、犬のように嗅^{きゆう}覚に大きく^B依存^{いぞん}するようになるでしょう。

そうして考えてみると、「我の身体あり、ゆえに我あり」とか「ここに我の身体あり、ゆえに世界あり」などということもできるように思います。

私たちの身体、あるいは肉体は「物」ではない。私たちそのものである。目で見るからこそ、耳で聞くからこそ、考えるんじゃないの。手で触^{さわ}るからこそ、鼻で嗅^かぐからこそ、舌で味わうからこそ、感じるんじゃないの。メルロ＝ポンティはそういう主張をしました。

「道具は身体の延長である」といったことも、メルロ＝ポンティは言いました。

たとえば、プロのギタリストにとって、ギターはもはやその人の身体の一部のようなものかもしれません。ギターを手にしたとたん、自然に指が動く。本人は「¹」¹している感じがするかもしれません。

ただし、ギターに興味のない人、ギターが弾^ひけない人にとっては、同じギターであっても、それは単なる物かもしれません。

あるいは、杖や長い棒があったとします。その杖や棒は目の不自由な人にとっては、非常に重要な道具で、身体の一部と
いってよいものに思えます。

自動車なども、自分の身体の一部になりやすいと思います。座席の感じ、ハンドルの位置、視界など、その車に乗り慣れ
てくると、なんとなく車も自分の一部のような感じがして、ほかの車を運転すると、「2」を覚えることがあります。

ギターも杖も車も道具なんだけど、もはや道具ではない感覚。習慣によって感覚がなじんだり研ぎ澄まされたりしてくる
と、物との関係も変わる。

身体性は服など身につけるものによっても変わります。たとえば、女性はハイヒールを履くと、なんとなく見える風景が
変わり、いつもと違った身体の感覚を得られるのではないでしょうか。

膝を悪くすると、歩くのもつらくなります。そうすると、視点が変わって、膝を痛めた人や高齢者の立場で道路を見るよ
うにもなります。

あるいは、男性が女装をしてみると、動作自体も変わるなど、かなりの変化が見られるかもしれません。
身体性は対人関係を考えても、とても重要です。

たとえば、話しているときに大事なのは、言葉の意味だけではないですよ。話を聞くときには、相手の顔の表情、手の
動き、話すテンポなどを【3】に判断して、「いいこと言うな」とか「この人、感じがいいな」などと判断しているは
ずです。

「おまえ、アホだなあ」という言葉も、言い方や表情によっては、親しみの気持ちの表われになるし、場合によっては、
褒め言葉にもなりえます。

コミュニケーションは言葉だけで成り立っているわけではない。^②むしろコミュニケーションの基本は身体性にこそある
ともいえます。

勉強に関して、頭だけをよくしようという発想では限界があるでしょう。体でわかる、体で感じる、体に刻み込む勉強

も大事ではないかと思えます。宮沢賢治も詩の中で、「からだに刻んで行く勉強が／まもなくぐんぐん強い芽を噴いて／どこまでのびるかわからない／それがこれからの新しい学問のはじまりなんだ」と言っています。身体というのはとても大事だと私も思っていて、この思いは『声に出して読みたい日本語』（草思社）などの私の著作にもつながっています。

「春はあけぼの。やうやうしろくなくなり行く、くく」……『枕草子』清少納言

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、くく」……『方丈記』鴨長明

「瘦蛙まけるな一茶是に有」……小林一茶

「知らざあ言つて聞かせやしよう。くく」……『弁天娘女男白浪（白浪五人男）』河竹黙阿弥

「どっどど どどうど どどうど どどうくく」……『風の又三郎』宮沢賢治

「国破れて山河あり 城春にして草木深しくく」……『春望』杜甫

こうした言葉を声に出して読んでみる。すると黙読していたときには味わえなかった、言葉のリズムやテンポが体に染み込んでいく感じがします。

江戸時代には、素読がよく行なわれました。素読はへ ☆ く、ともかく声に出して文字を読むことです。そうして漢文などを体に染み込ませていったのです。これはまさに身体性のある学習法です。

今の時代は、たいいていのことはインターネットを使って調べることが出来ます。「あのスポーツ選手の名前はなんだったかな？」と思えば、それもすぐに調べられます。しかし、^③それは「身につけている」ことではありません。

ギタリストがギターの弾き方を身につけているように身につけ、染み込ませる。メルロ＝ポンティの身体論からは、そうした学習法の大切さも学び取れます。

（中略）

身体性は時代や国、地域によっても特徴とくちょうがあります。江戸時代と明治時代の人の身体性は違うように思うし、東京と沖縄おきなわの人の身体性も違うように思います。

(中略)

方言にも身体性はあります。津軽弁つがる、富山弁、名古屋弁、京都弁、広島弁、土佐弁とさ、博多弁はかた……それぞれの身体性があります。「どやう」「湯さゆ」。これは「どこに行くの?」「風呂ふろだよ」という津軽の言葉。津軽の人たちの身体性を感じます。

広島では幼児も「わしゃあ、○×△じゃけんけんのう」などと言うこともあるようです。映画の『仁義なき戦い』では広島弁が飛び交います。私は静岡しずおかで育ちましたが、『仁義なき戦い』の登場人物が静岡弁で話したら、迫力はかりよくが足りなく、映画の魅力みは半減りよくしてしまいそうです。

方言がC廢すたれてしまうと、その地域の人の身体性も大きく失われてしまうでしょう。

方言などによる違いはあるけれど、日本人全体には、農耕民族的な身体性が貫つらぬかれていてのように感じます。それはヨーロッパや中東、アメリカの人たちとは違った身体性です。

そのため、たとえば帰国子女の中には、日本人との会話やそのときの相手の表情などに戸惑とまじう人もいます。外国の身体性が染みついていてることによる違和感でしょう。反対に、長く日本に住んだアメリカ人が母国に帰国したら、「イエス」「ノー」がはつきり言えなくなっていたという話もあります。

時代、国、地域と身体性は密接につながっているのです。

こうして見てくると、④ 私たちの身体は多くの文化や歴史を帯びていることがわかります。私たちの身体は私たちの人生とこの世界に重要な意味を持って存在している。そのことに改めて気づかされます。

(齋藤孝『使う哲学』より)

*メルロロポンティ：フランスの哲学者。

問一 A 提唱 B 依存 C 廃れて の語句の意味としてもっとも適当なものをそれぞれあとから一つ選び、記号で答えなさい。

A 提唱

ア 意見などを人に示して主張すること

イ 自分の意見を議論する場に提供すること

ウ 自分の考えた仮説を実際の場面で試してみること

エ 自分の考えや主張を広めるために、実際に行動すること

B 依存

ア 他と異なった意見をもつこと

イ 他の影響をうけること

ウ 他のものに頼ること

エ 他と切り離されていること

C 廃れて

ア 不用になり、使われなくなって

イ 人気がなくなって

ウ 古くさくなって

エ 本来の正しいありかたでなくなって

問二 ① 私たちは、身体として世界に住みこんでいる というのは、どのようなことを言っているのですか。もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私たち人間は、視覚以外の感覚が鈍くなつてはいるものの、ただ肉体としての身体がある限り世界に存在できるといふこと。

イ 私たち人間は、優れた頭脳を持っているが、身体として世界に存在しているという意味では、ノミと大きな違いはないといふこと。

ウ 私たちはノミや犬と違って、視覚や嗅覚がバランスよく保たれているため、世界を正しくとらえることができることといふこと。

エ 私たちは五感という身体感覚を通して、自分が存在する世界との接点を持ち、さまざまなかんじを感じたり、考えたりしているといふこと。

問三 【1】～【3】にあてはまる語句として、もっとも適当なものをそれぞれ次から一つ選び、記号で答えなさい。

【1】 ア 身体化 イ 一体化 ウ 合理化 エ 自然化

【2】 ア 違和感 イ 存在感 ウ 生活感 エ 危機感

【3】 ア 客観的 イ 断片的 ウ 総合的 エ 個人的

問四 ② むしろコミュニケーションの基本は身体性にこそある とありますが、筆者がこのように言うのはなぜですか。五

十字以内で答えなさい。

問五 へ ☆ へ にあてはまるものとして、もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 内容を理解するのはあきらめて
- イ 内容を十分に理解したうえで
- ウ 内容の理解度をあげるために
- エ 内容の理解は二の次にして

問六 ③ それは「身につけている」ことではありません とありますが、どのようなことをいっているのですか。もっとも

適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ただ知識を得ただけでは、十分に理解して自分のものとしたとは言えない。
- イ インターネットの情報を信じきってしまうと、深く学ぶことができなくなる。
- ウ 辞書やインターネットを使って手軽に学んだことは、すぐに忘れてしまうものだ。
- エ 知識を増やせば増やすほど、深く考えることをしなくなってしまう。

問七 ④ 私たちの身体は多くの文化や歴史を帯びていることがわかります とありますが、どのようなことを言っているの

ですか。具体的な例をあげながら、百字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 六年二組のウンチク王——が、ぼくのあだ名だ。

いろいろなことをたくさん、ぼくは知っている。図書室の本をかたっぱしから読んで、テレビで気になった言葉があるとすぐに百科事典やインターネットで調べて、覚えたことは忘れないようにノートに書きつける。『きおくノート』と名付けたそのノートは、三年生のときからつけはじめて、もう八冊目になった。暇なときにはそれをばらばら読み返して、忘れていた事柄を見つけると「あぶない、あぶない」と記憶にきちんと刻み直す。

おかげで、ぼくはクラスの誰よりも物知りになった。戦国時代の武将の名前や、星座にまつわる神話、画数がたくさんある漢字については、担任の先生よりもくわしい。

たったいまも、豊臣秀吉が天下統一した頃の全国各地の「国」と「大名」の名前を北から順にすべて諳んじて、昼休みの教室を「おおーっ」とどよめかせたばかりだ。

うれしかった。本を読んで新しいことを知るの、ほんとうに楽しい。

でも——。

ぼくは教室の隅をちらりと見る。

女子が数人集まっておしゃべりをしている。その中に、カワムラさんもいる。

ぼくはカワムラさんが好きだ。五年生で初めて同じクラスになってから、ずっと。

カワムラさんはどうなんだろう。ときどき「カワムラさんもオレのこと好きなのかな？」と思って胸がときめくけど、「やっぱりオレのことはなんとも思ってないのかなあ……」と落ち込んでしまうときだって多い。

カワムラさんの気持ちがわかればいいのに。心の中をこっそり覗き込んで、好きな男子が誰なのか知ることができるといいのに。

図書室のどの本にも、カワムラさんの心の中は出ていない。戦国時代のことなんて知っているぼくなのに、同じ教室

にいるカワムラさんの気持ちはナゾのままだ。

② それがちよつと悔しい。

ほとくのウンチク披露が終わると、昼休みの教室は、別のネタで騒がしくなった。教室の後ろで、ヤマダたちがスドウを相手にプロレスごっこを始めたのだ。

六年二組には、とても残念で嫌なことだけど、いじめがある。男子の一部——ヤマダのグループが、スドウをしつこくからかったり教科書に落書きをしたり、無理やりプロレスごっこに付き合わせて泣かせたりする。

いじめはよくない。

そんなの、誰でも知っている。ヤマダたちだって、学級会で「みんな仲良く」というクラス目標が決まったときには、手を挙げて賛成していた。なのに、あいつらはスドウをいじめる。先生はいつも「いじめはひきょう者のすることだ」「いじめるのは人間として恥ずかしいことだ」と言っていて、ヤマダたちもそれをよく知っているはずなのに、いじめをやめない。スドウもスドウだ。「いじめに遭ったら、一人で悩まずに、すぐに先生や親に相談しなさい」と言われていて、自分でもわかっているはずなのに、先生にはなにも言わない。きつと、お父さんやお母さんにも黙っているのだろう。知っていても、それを実行しないんだったら意味がないじゃないか……。

でも——。

③ ぼくだって、そうだ。いじめがよくないことは知っている。勇気を持っていじめを止めなければいけないことも知っている。目の前でスドウがいじめられているのも見ているし、スドウがとても悲しんでいることだって、ちゃんと知っている。

だけど、なにもしていない。スドウを取り囲んでプロレスの技をかけるヤマダたちに、他の友だちと一緒に「ひでーっ」「残酷ーっ」と声をかけることはあっても、それは冗談交じりの口調で、あいつらは逆にウケてるんだと勘違いして、よけい張り切って、授業が始まるチャイムが鳴るまでやめない。

「そんなことやめろよ！」と、なぜ強く言えないんだらう。ヤマダを怒らせたなら、今度は自分がスドウの身代わりになって

しまいそうだから——？ よけいなことを言うと自分があぶない、と知っているから——？

ときどき思う。もしもぼくが『風の又三郎』みたいな転校生だったら。ある日突然教室にやってきて、すぐにまた別の学校に転校してしまう、そんな立場だったら。

ヤマダに「やめろよ！」と言うだろう。無視されたら、つかみかかってでもやめさせるだろう。ヤマダには子分がたくさんいるというクラスの人間関係や、ヤマダを怒らせると中学生の兄貴まで仕返しにくるという事情をなにも知らなければ、最初に胸に抱いた勇氣や正義感を、そのまま、なんの迷いやためらいもなくぶつけられるだろう。どうせまたすぐに転校してしまうのだから、「いま」の憤りだけでまっすぐに行動できるだろう。

でも、ぼくは、ヤマダのいろいろなことを知っているから。ヤマダを怒らせたあとに待ち受けているヤツカイなことも、想像できるから。

④ 知れば知るほど、臆病になる。先生は「知識を増やすことで、生きる知恵を育てなさい」と言う。いじめに をするもの、生きる知恵のひとつなんだだろうか。

そんなの、ひきょうな言い訳だよ——ということだって、ぼくは知っているけど。

学校から帰ると、お母さんがこわばった顔で教えてくれた。田舎の病院に入院しているおじいちゃんの具合が急に悪くなったのだという。

翌朝、学校を休んで、飛行機でお父さんのふるさとに向かった。

病室のベッドに横たわったおじいちゃんは、夏休みに会ったときの元気な笑顔が嘘のように、痩せて骨と皮だけになっていた。顔に酸素マスクをかぶせられて、声をかけても返事をしないし、目も開けない。

おじいちゃんは死んでしまうのだろうか。

知っているひとが亡くなるのは、これが初めてだ。心臓が動かなくなるのが死ぬことなんだというのはわかっているけど、おじいちゃんを見つめていると、心臓とか、脳波とか、血圧とか、そんなことはぜんぶ忘れてしまった。

もう、おじいちゃんと会えなくなる。

おじいちゃんとセミ捕り^とをしたり、たき火をしたり、トランプをしたり、一緒におもちをついたり……そんなことがぜんぶ、もうなにもできなくなるんだと思うと、^⑤胸が急に熱い^{あつ}ものでいっぱいになった。

おじいちゃんがいなくなる。いままでいたのに、いなくなる。いなくなったあとは、もう二度と、会えない。

おばあちゃんはおじいちゃんの手をさすりながら、涙まじりに昔の思い出を話していた。ぼくの知らない、お父さんがまだ子どもの頃の話を、たくさん。

おじいちゃんが泳ぎが得意^{とくい}だったことを初めて知った。お父さんに野球を教えたのがおじいちゃんだったことも、歌がへただったことも、シジミの味噌汁^{みそじる}が大好物^{だいこうぶつ}だったことも、ナイターで広島カープが負けると機嫌^{きげん}が悪くなったということも……初めて聞く話ばかりで、^⑥その一つひとつが胸にすうっと染み込んでいく。

もっと知りたい。もつともつと、おじいちゃんのことを知りたい。友だちに話して自慢^{じまん}するためじゃなく、「すごいなあ、よく知ってるなあ」と先生をびっくりさせるためでもなく、おじいちゃんとはもう二度と会えないから、おじいちゃんのことを、もつと知りたい。

「おじいちゃんの思い出、忘れるなよ」

お父さんがぼくの肩^{かた}に手を載^のせて言った。「みんなが覚えてれば、みんなの思い出の中におじいちゃんはずうっといるんだから」と涙ぐんでつづけた。

「……忘れないってば」

ぼくは言った。家に帰ったら、新しい『きおくノート』をつくろう、そこにおじいちゃんの思い出をたくさん書こう、と決めた。

でも――。

ほんとうはそんなことしなくても忘れないよ、絶対^{ぜったい}に、と心の中でおじいちゃんに声をかけた。

おじいちゃんのお葬式を終えて、ひさしぶりに登校した。六年二組の教室は、ぼくが学校を休む前とにも変わっていない。カワムラさんはあいかわらず女子で集まっておしゃべりしているし、ヤマダはあいかわらず教室の後ろでスドウをいじめている。

⑦でも――。

ぼくはおじいちゃんとお別れをした。たくさん泣いて、親戚からおじいちゃんの思い出話をたくさん聞いて、たくさん覚えた。ぼくが生まれたという電話を受けたとき、おじいちゃんは受話器を放り投げてバンザイをしてくれたんだと、初めて知った。

ぼくは変わった。自分でもうまく言えないけど、^⑧どこかが、なにかが、変わったんだと思う。

カワムラさんをちらりと見た。カワムラさんの六年生の思い出にぼくがたくさん出てくればいいな、と思う。これからの思い出の中にも、ずうっと、いつも、ぼくがいるといいのにな。

「やめてくれよお、痛い痛い痛いつて……」

ヤマダにヘッドロックをかけられたスドウが、泣きべそをかきながら声をあげた。ぼくは知っている。スドウの悲しさと悔しさを知っている。そして、自分がなにをしなければいけないかも、ちゃんと。

⑨ぼくは教室の後ろに向かって歩きます。

がんばれ、とおじいちゃんが言ってくれた。

(重松清『きみの町で』所収「知るって、なに？」より)

問一 ^①六年二組のウンチク王――が、ぼくのあだ名だ とありますが、「ウンチク王」と同じ意味の言葉を文中から三字でぬき出しなさい。

問二 ^② それがちよつと悔しい とありますが、「それ」とは何を指していますか。もつとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア カワムラさんの気持ちを知らうとしてもわからないこと。
- イ カワムラさんが教室ではいつも女子とばかりいっしょにいること。
- ウ カワムラさんの気持ちについて書いてある本が図書館にないこと。
- エ カワムラさんが自分のことを好きではないこと。

問三 ^③ ぼくだって、そうだとありますが、「ぼく」と「ヤマダたち」と「ストウ」との共通点は何ですか。文中の語句を使って三十字以内で説明しなさい。

問四 ^④ 知れば知るほど、臆病になる とありますが、「臆病」とは具体的にどのような心情だと考えられますか。次から **適当でないものをすべて選び、記号で答えなさい。**

- ア クラスの人間関係やいじている側の家庭の事情を知ることです。自分が危険な目にあうことへのおびえ。
- イ いじている側の性格から考えると、よりいっそう事態が悪化してしまうかもしれないことに対する不安。
- ウ 「いじめはよくない」という知識がふえるほど、現実の場面でどう行動してよいかわからなくなるという迷い。
- エ 「生きる知恵」を身に付けることによって、ずる賢くふるまってしまうかもしれないという心配。

問五 に入る語句としてももつとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア したり顔
- イ 知らん顔
- ウ 浮かぬ顔
- エ 心得顔

問六 胸が急に熱いものでいっぱいになった とありますが、このときの「ぼく」の気持ちの説明としてもっとも適当な

ものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 夏休みに会ったときは元気だったおじいちゃんが突然死んでしまうということに、大きなショックを受けている。
- イ おじいちゃんが骨と皮だけのすがたに変わり果ててしまったということに対して、とても残念に思っている。
- ウ たくさんの思い出を作ってくれたおじいちゃんと二度と会えなくなるということに対して、深い悲しみを覚えている。
- エ おじいちゃんの心臓や脳波や血圧の値が急に悪化したことに対して、あせりやもどかしさを感じている。

問七 その一つひとつが胸にすうつと染み込んでいく とありますが、「染み込んでいく」とはどのような様子をたとえた表現ですか。「その」の指す内容をふまえて答えなさい。

問八 でも について、あとの各問いに答えなさい。

(1) 「――」のはたらきについて、もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ある言葉の意味についての説明を加える。
- イ 瞬間的に時間の経過を止める。
- ウ 言葉にできない心情が残っていることを表す。
- エ 場面に登場しない人物の言葉を引用する。

(2) でも かどうかの一文にかかっていますか。文中から探し、最初の五字をぬき出しなさい。

問九 ^⑧ ところが、なにかが、変わったんだと思う とありますが、このときの「ぼく」の説明としてもっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア さまざまなことを「知る」経験を通して、自分のかけがえのない命に気づき、自分の思いを大切にしていって、前に向かって進む勇気を得たということ。

イ おじいちゃんの死を通して、人に自慢できるような人生にしたいと考えが変わり、人とは違った道を歩こうと決意したということ。

ウ おじいちゃんとの別れから、さまざまな感情を味わい、身近な友人に比べて大人びた行動ができるようになったということ。

エ 新しい『きおくノート』をつくろうと決意し、たくさん記憶することが自分の生きる力になると確信したということ。

問十 ^⑨ ぼくは教室の後ろに向かって歩きだす とありますが、「ぼく」はこのあとどのような行動をとったと考えられますか。文中の語句を使って八十字以内で説明しなさい。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の——部の漢字をひらがなに直しなさい。

- ① 長い旅路に行く。
- ② 日本家屋の特徴を研究する。
- ③ 海外に出て見聞を広める。
- ④ 障子から明かりがもれる。

問二 次の——部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ウチュウ飛行士を目指す。
- ② ピアノでバンソウする。
- ③ 貴重な文化イサン。
- ④ オンワな口調で話す。

問三 次の①、②の——部の言葉を、(例)にならって言い切りの形に直しなさい。

(例) あなたとゆっくり話したい。(話す)

- ① 草花を使った実験をしてみようと思う。
- ② おだやかな海に沈んでいく夕陽を見つめる。

